

今回は、致知 2015 年 6 月号「一天地を開く」より「人生を花開かせるヒント」を紹介します。

「一度しかない人生をどう生きるのか」

「何のために働くのか」

「運のある人、ない人の差はどこにあるか」

こう問いかけられた時、皆さんは何と答えますか。明快に断言できるでしょうか。世界の神経解剖学に大きな足跡を残し、京都大学第16代総長を務めた平澤興(ひらさわ・こう)氏の未発表の講話録がこのたび見つかりました。神経解剖学の世界的な大家であり、人間探究の達人が語った、「人生を花開かせるヒント」とは。

仕事は人のためにするものではありません。普通はそんなふうに思いますが、それは誠に平面的な考えです。仕事は自らの魂を生かすためにするものだと、私も固く信じております。ちょっと見たところ、つまらんような仕事をしておっても、その仕事に本気になってやっておること、それが立派な人生ではないかと思うのであります。運というものは仕事なりすべての面で、やるだけのことをやった人、徳を積んだ人、そういうところに来るもんだと思うのであります。よりよき将来に向かって建設的なものならば、我われは忍ぶべきものは忍ばねばならんと思います。これはあらゆる面でそうであります。

しかし、忍ぶということは、ただやせ我慢をするだけではなくして、将来のよりよきものを目指しながら、忍ぶのであります。そういう意味では、いくつになっても人間には最後まで仕事があると思います。人生はどこかに一つの夢を持つということ、そしてそれを本当に誠実にいかなる場合にも、自己をだまさないでしかも負けないで、不屈性を持ってやりとおすということであります。私は思います人生というものは、きょうと明日が我われの手の中にある、過去のことはいかなる失敗も成功も、手を離れておるのであります。人生というものは希望を持って生きたい。一番つまらんのは、愚痴をこぼすことだろうと思います。愚痴は全く自分自身を弱め、希望を失い全く何にもなりません。どうも世の中を広く見ておりますと、結局愚痴をこぼしたり、自分に文句を言ったりという人は、人生の最後を見ますとやっぱり哀れであります。若い時に人に「何というお人好しだなあ」というふうに笑われながらも、なおかつその笑いの中で平然として耐え忍んできた人は、確かに晩年はよいのが多いのであります

Q1: 人生で一番つまらない事は何だと言っていますか？

A2: ()

Q2: 運のある人とない人の差はどこにあると思いますか？

A2: ()